
空間魔術師 ~ s p a c e w i z a r d ~

坂口 力也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空間魔術師 \ s p a c e w i z a r d \

【Nコード】

N 4 6 4 6 C

【作者名】

坂口 力也

【あらすじ】

魔術が科学とし発達してきた国『グランシーク』この国にある魔術学校に通う15歳の少年ヴァン・ダムホープの物語

プロローグ

舞台は科学より魔術が発展してきた国 『グランシーク』

この国の魔術学校に通う15歳の少年ヴァン・ダムホープの物語

リリリリリリッ

部屋に目覚まし時計のアラーム音が響く。

しかも目覚まし時計の針はまだ4時を指している。

快適な眠りを妨げるアラーム音は、夜更かしをした少年にしてみればとてつもなく不快なものだ。

それでも今日は早起しなくてはならない大事な日。布団から一本の手が伸びて音を頼りに目覚ましを探す。リリリリリ…

ピタッ、とアラーム音が止まった。

「…ちきしょー眠い…」

そう言つつも少年は^{ヴァン・ダムホープ}布団から起き出した。

「ふああ……………準備するか……………あれ？」

目覚まし時計の時刻は4時を指している、…が、壁かけ時計（最新魔導式時計）の指針は……………4時35分……………。

「故障ー！？…やばい遅刻するー！！」

ヴァンはドタドタと制服に着替え、パンを口に加え家を飛び出して行った。

「ふいつてひまーふ（行つてきまーす）！」パンを食べながらいつものコンクリートの道をひたすら走る。

「集合4時40分…今……………4時38分！！」

家から学校までは走っても15分はかかる…要するに遅刻。

「…しかたない、バレなきゃいいんだ。」

そう言つとヴァンは両手を合わせ息を大きく吸い込んだ。

「……………よし！！……………c a l l！！」

そう叫ぶとヴァンの足下のコンクリートに魔法陣が現れた。

「space magic gate!!」(ゲート)「
スペースマジック

その瞬間、魔方陣から光が発生しヴァンを包みこんだ。

やがて、その光はだんだん小さくなっていき、遂にはヴァンと一緒に消えてしまった。

く変わって4時38分学校く

「よし。全員そろったか？」

黒い教員用のマントを羽織った男
ライト・フローバー

が最終点呼をしている。「先生ー！うちの班のヴァンがまだ来てません！」

「ミリアの班は陸とヴァンだろ？陸はいるのか？」

「陸はいます。でもヴァンが……」

「めずらしいなヴァンが遅刻とは。陸なら遅刻の常習犯だが……」

……

「先生!!」

ミリアが突然声をあげた。

「どうした？」

「空が!!」

ミリアのが空を指差している。

「空が…空間が歪んでます!!先生あれは？」

空を見てライトは驚きの声をあげた。

「なに!!…あれは空間魔法だ!!…いったい誰が？」

「あつ!!開いてく!!」

今まで歪んでいた空間に穴が開きそこから大きな光の球体が飛び出し、地面にゆっくりと降りて来た。

「みんな近付くな!!」

そう指示を出すと、ライトは杖を構え光の球体に近付いて行った。

「……!!光が……」

光の球体から光が消えていく。そして中から一人の少年が現れた。

「ヴァン!？」

「んっ!?!…なんだミリアか。」

ヴァンは心底つまらなそうに呟いた。

「なんだってなによ!!それよりどうしたの?今の?」

「どうしたのって、そりゃ…」

ヴァンがあたりを見回すと他の先生達まで集まっている。

ライトにいたっては睨んでいる。

「…そりゃ……。あ、あれだよ、あれ。遅刻しそうだったから父さんの使い魔かりて『ゲート』で飛んで来たってわけで、して……」
もちろん嘘である。

「本当か？」

「も、もちろんです!先生……」

「…ならいいが。空間魔法は危険なんだぞ!失敗すれば体がバラバラになることもある。今度から遅刻しないよう気をつけなさい。」

「そーよ!お父さんに感謝しなさいよ。」

「はい…。(アブねー!!)」

ヴァンはギャラリイがいなくなるのを確かめて、ホッと息をついた。

「本当危なかったな!。」

「ヴァーン!!早く並んで!!」

向こうでミリアが手を振って呼んでいる。

「わかったわかった!!」

そう言ってヴァンはミリアの元へ走って行った。

第2話

『契の試練』 それは『契の魔石』と呼ばれる石を媒体に、自分の魔力の姿を『具現化』させ、『同調』することで、それを『使い魔』として契約する試練。

指紋や声紋と同じで、魔力の姿は全員違うため、使い魔の姿もみな違う。

使い魔は魔術師にとって生涯のパートナーとなる。

今日はその『契の試練』を行う大切な日。

「にも関わらず遅刻してきて、何でそんな緊張感のない顔してられんのかしら…。」

ミリアが、はあと息をつきながらヴァンに視線を向ける。

「何でつて別にこんなの緊張する事も無いじゃん。なあ陸…。陸？」
陸に視線を向けるとそこにはいつもの元気な姿は無かった。

かわりに青ざめた顔が校庭で行われている契の試練の様子を凝視している。

「…陸お前もしかして緊張してるのか？」

ヴァンの問い掛けに陸が反応し、喋り出した。

「当たり前だろ！契の試練だぞ！なんでお前は緊張しないんだ！？次の次俺らだぞ！てゆーかなんでみんなの真ん前でやんなきゃいけないんだ！？もし失敗したら明日から学校行けねーよー！」

陸は一気にそう言うときぜいぜいと息をきらした。

「とか言ってるあいだに、次俺らだぞ。」

「うそー！」

陸は明らかに緊張しているようで、あーだの、うーだの呻き声をだしている。

「おっ！やつと俺らの出番か！」

前の班は全員成功したらしく、みんな嬉しそうに泣いていた。

「6班は早く来なさい。」

担任のライト先生が呼んでいる。

「よし！行くか！」

陸はまだ呻いていたがミリアとヴァンで引つ張って来た。

「全員いるな。説明はしてあるが一応確認だ。」

そう言つて、ライト先生は手元の本を開いた。

「使い魔の契約時、契約者は2人までサポートを付けていい。石に魔力を込めれば後は勝手に出てくる。なんとしても『同調』しろ。以上！」

（えらい適当に言つな…。）

「なんだヴァン。」

「えっ！いえなんでも…。それより早く始めましょう。」

「そうだな。まず誰から行く？」

ライトが問いかけて来た。

「陸、はあれだから無理ね。私が最初にやるわ。」

そう言つてミリアが一步前に出た。

「わかった。サポートはつけるか？」

「はい。ヴァンと陸を！いいわよね陸？」

陸はサポートなら、と言つて頷いた。

「よし！ではミリア契の石を持ち魔力を込める。」

「はい。」

ミリアはライトの手から石を取り魔力を込めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4646c/>

空間魔術師 ~ s p a c e w i z a r d ~

2010年10月17日06時43分発行